「市民科学」プロジェクト2024年度シンポジウム
郷土に向かい合う人々　2025.02.11 すわっチャオ

牛山初男氏の方言学と市民科学の実践

大西拓一郎
（国立国語研究所）

---

1. はじめに

- 牛山初男
  方言学、言語地理学を実行した諏訪・茅野の市民科学者
  方言学界では著名、諏訪・茅野ではほぼ無名
  方言学界では方言研究は著名、それ以外のことは未詳
- 牛山氏の資料
  牛山家保管の資料
- 教育者としての牛山氏
  永明高等学校（茅野高等学校）関係
- 牛山氏と三澤勝衛との関係
  三澤勝衛：諏訪における市民科学の出発点、キーパーソン
- 諏訪の市民科学の本質を考察

2. 市民科学の方言学者、牛山初男

- 遺族からの聞き取りなど実践
- 関連論文
  大西拓一郎（2024）「信州諏訪における市民科学としての言語地理学ー牛山初男、土川正男、浅川清栄ー」『方言の研究』（日本方言研究会）10、265-294頁

2.1 牛山氏の生涯の概要

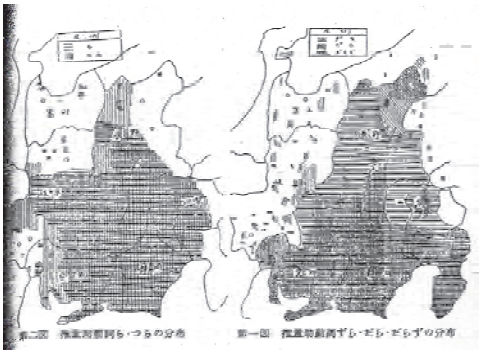
- 出身地
  長野県茅野市湖東須栗平
- 生没年
  1907（明治40）年－1983（昭和58）年、享年76歳
- 学歴
  諏訪中学校 1922年入学（第28回生）：三澤勝衛と重なる（後述）。
  東洋大学 進学、橋本進吉、小林好日から指導
- 教員歴
  富士見青年学校、木曽福島小学校、永明高等家政女学校、
  永明高等学校北山分校、永明高等学校花蒔分校、
  永明高等学校（現、茅野高等学校）
  永明高等学校では定時制でも教える。
  担当教科：国語、実業（農業）、生物
- 交友など
  諏訪中学校の同窓会関係
  臼井吉見氏（作家『安曇野』が代表）兵役時代に同じ連隊

牛山初男
（牛山家提供）

2.2 牛山氏の方言学・言語地理学

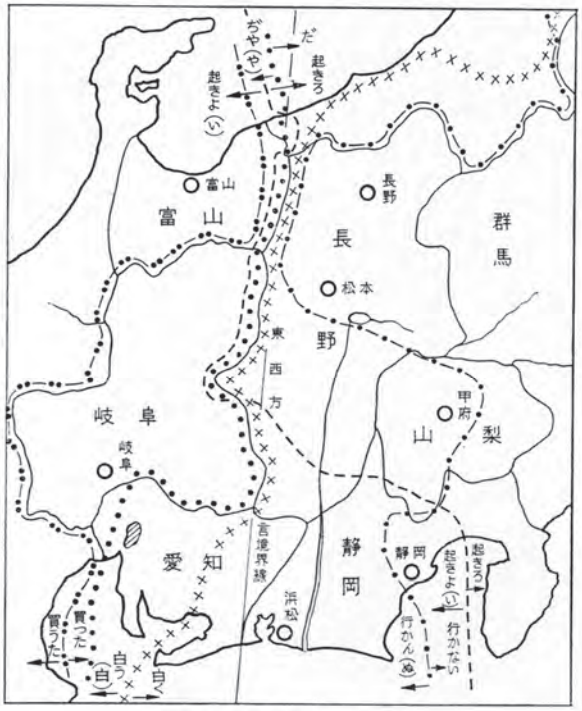
- 生涯約20本の論文、内14本が方言分布関係
  分布への強い関心
- 実証的言語地理学
  自身の調査データを元に地図を描いて分析
  牛山初男（1953）「語法上より見たる東西方言の境界線について」『国語学』12、56-63頁
- 方言分布の実時間（リアルタイム）比較の先駆け
  東西方言の境界が変化しないことを発見
  学会誌掲載、高い評価、学界のアンソロジー**『日本の言語学 6 方言』（大修館書店1978年）**にも採録
- 東洋大学 井上賞 受賞 1980年6月
  大学創業者 井上円了を記念し、建学の精神を受け継ぎ、専門分野における顕著な学術研究に寄与
- すべての著作を通して、三澤勝衛への言及はない。
  ただし、自著（後述）を三澤文庫に寄贈（渡辺真由子氏私信）

牛山初男（1953）「語法上より見たる東西方言の境界線について」『国語学』12



牛山初男（1954）「推量助動詞「ずら」「ら」等の分布」『信濃』6-6

牛山初男（1982）「長野県旧諏訪郡下における言語変化」『信濃』34-12



語法から見た東西方言境界線
牛山初男（1969）13頁

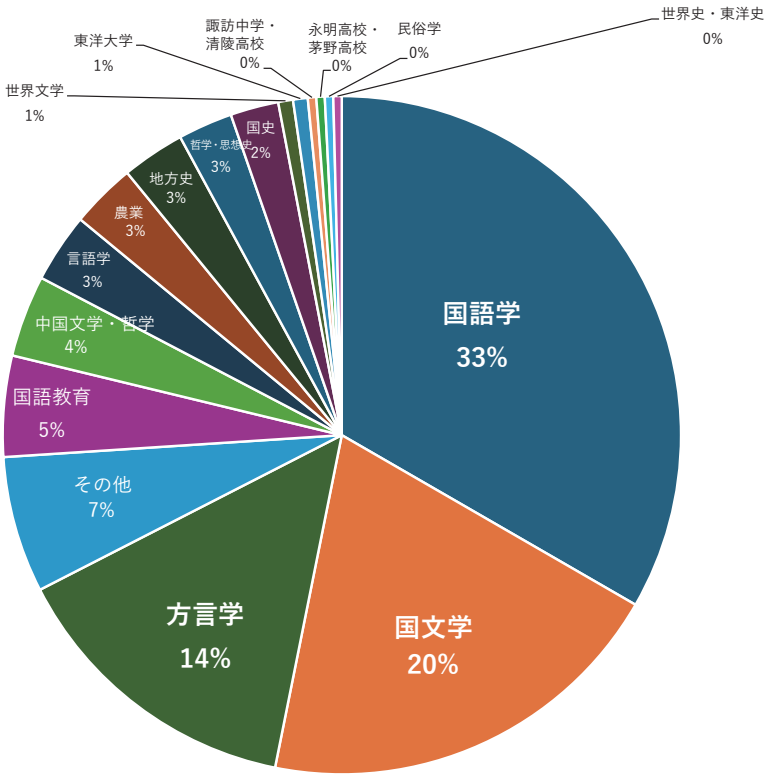
- 代表著書
  牛山初男（1969）『東西方言の境界』（信教印刷）
  - ・定年退職を機に論文を一冊に
  - ・地図もきれいにトレースし直し
  - ・その後も論文執筆は続く。
  - ・牛山資料（後述）には、原版の凸版と考えられるものや修訂の書き込みも残されている。

---

3. 牛山氏の資料

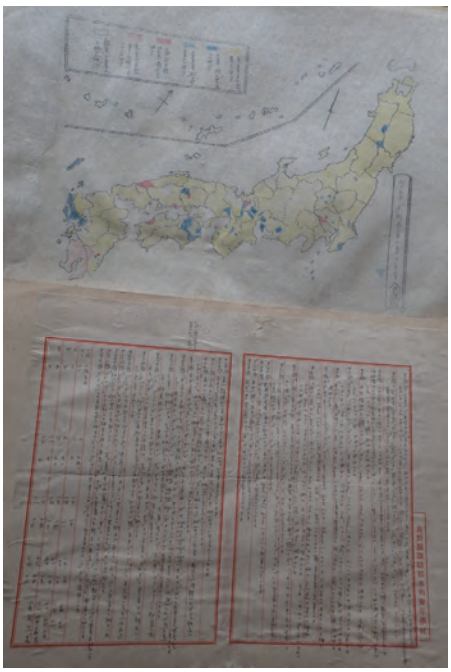
- 資料は牛山家の蔵に遺されていた。牛山家で今後の永続的保管は不可能
- 2024年4月～2025年1月に全体を整理・目録化
- 一部を茅野市八ヶ岳総合博物館と国立国語研究所に寄贈・保管（申請中）
- 資料を前にした期待
  - ・調査資料：調査票、カード、集計表、録音メディア
  - ・茅野市方言辞典の予稿（？）
    →信濃毎日新聞の記事（牛山家保存のスクラップ、1978年10月18日）
  - ・三澤勝衛を代表に諏訪の市民科学者との関係を示す資料はあるか。

3.1 資料の内訳



牛山資料の割合（%）

3.2 方言学・言語地理学



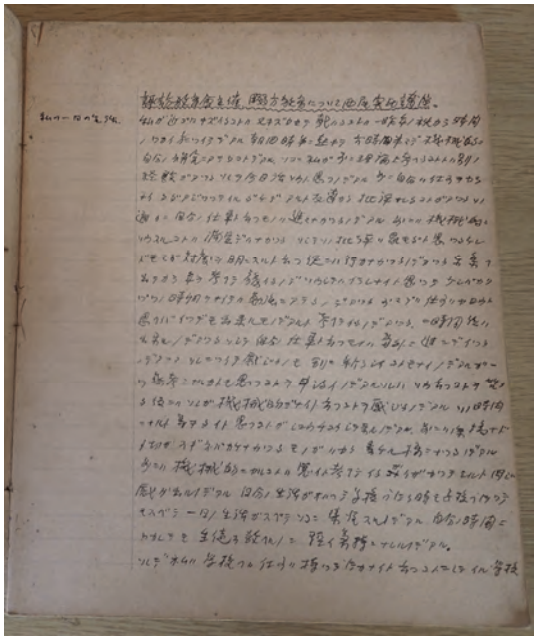
・**国語調査委員会（1905）『音韻分布図』**
日本で最初に作成された言語地図の写し
当時は簡単には手に入れることができなかった。
もとの色刷りを模写している。

各地の方言研究者たちが、**ネットワークを形成して、互いに情報を交わしていた**ことを物語る資料。このような資料、雑誌を作成し、交換してきたことで、各地方言のデータが蓄積された。現在の方言学の基盤形成がここにあることを示している。

調査資料（調査票、カード、集計表、録音メディア類など）は、結局、見つからなかった。茅野市方言辞典の予稿的なものもなし。（ただし、複数の方言辞典に書き込み）
未開封の束がまだあるので、あるいはその中にあるのかもしれない。

3.3 国語学・国文学・漢籍

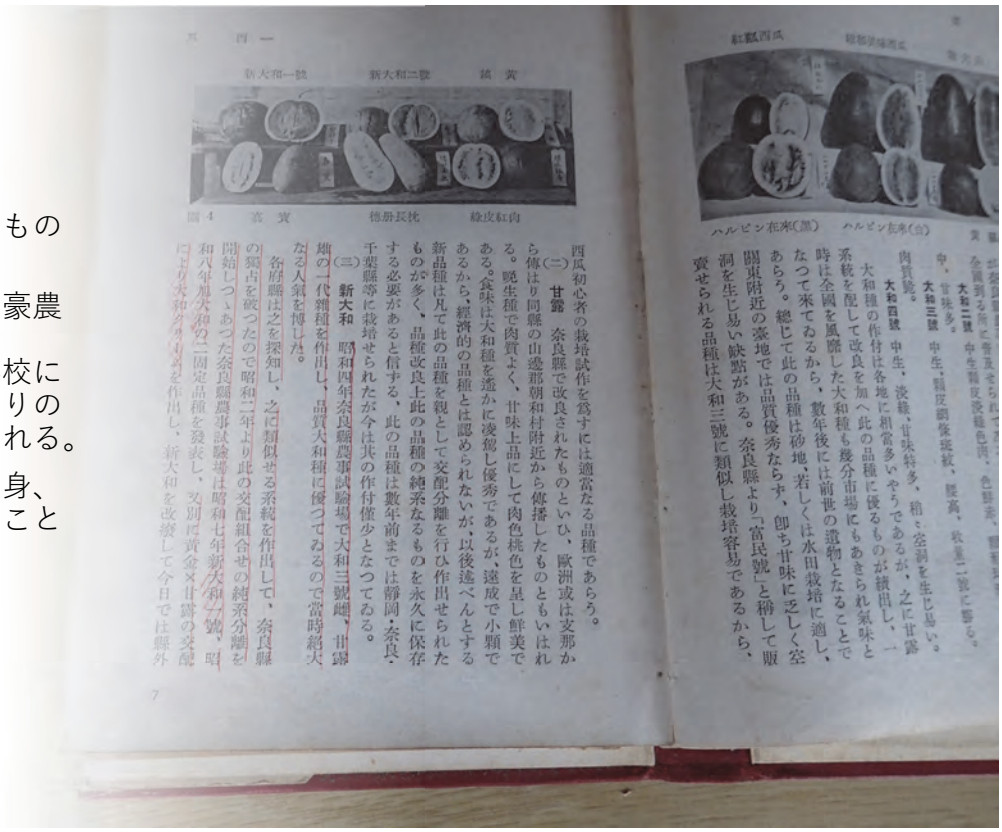
- 国文学の古典が多く含まれていた。線引きや書き込みも多い。往事の国語学の学生は、（方言を専門にしても）古典によく通じていた。
- 漢籍にも線引きなどが多く見られた。国語学の学生は、漢文も読むのが普通だったのだろう。
- 木崎夏期大学や諏訪教育会の講演などの講義録ノートも遺されており、知識欲旺盛だったこともわかる。



西尾実（国立国語研究所初代所長）による講演の記録ノート

3.4 農業

- 農業関係の本：30冊弱
  線引きや書き込みのあるものも少なくない。
- 牛山家はもともと当地の豪農だったらしい。
  当時、僻地から諏訪中学校に進学できたのは、それなりの家格があったからと思われる。
- 遺族の話でも、牛山氏自身、農業を実践していたとのこと



3.5 国語教育

- 国語教育に関する本：30冊
  時枝誠記など、著名な文法学者の本をよくそろえている。
  ただし、書き込みなどはあまり見られない。
- 農業の方が熱心に見える。
  高校で農業を教えるにあたり、独自に学んだのだろう。
  自身の家業も含め、実践に関心があったのではないか。

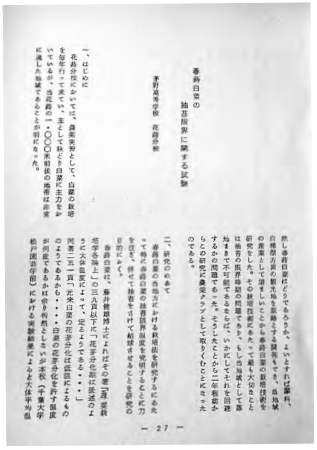
4. 教育の実践：分校・農業

- 牛山初男（1981）「北山分校の思い出」「花蒔分校のこと」長野県茅野高等学校定時制閉校記念誌編集委員会『定時制閉校記念誌三十三年の歩み』長野県茅野高等学校定時制閉校記念事業実行委員会
- 永明高等学校北山分校（1948年開校、分校主任：牛山初男）
- 永明高等学校花蒔分校（1952年開校＝北山分校＋湖東分校、分校主任：牛山初男、**牛山氏は北山・湖東村に働きかけるなど設立に尽力**）
- 1967年、分校が中心校（永明高等学校）に統合
- 分校の設立：青年学校（勤労に従事する青少年の教育）の継承
- 分校の授業：夕方以降に授業
- 当該地域の産業：農業

分校での教育実践：農業

- 水稲の品種試験（北山分校）：永明高校定時制研究誌に発表、資料未見、校友会誌2～4（1950～1952）、研究集録6～10（1958～1962）『長野県茅野高等学校五十年誌』による
- 白菜の抽苔試験（花蒔分校）：気温・日数とトウ立ちの関係を調査茅野高等学校花蒔分校「春蒔白菜の抽苔限界に関する試験」『研究集録』14（1966）
- 長野県茅野高等学校花蒔分校「春蒔白菜の抽苔について：二ヶ年の試験の結果から」『研究集録』15（1967）
- 養豚・養鶏の実践

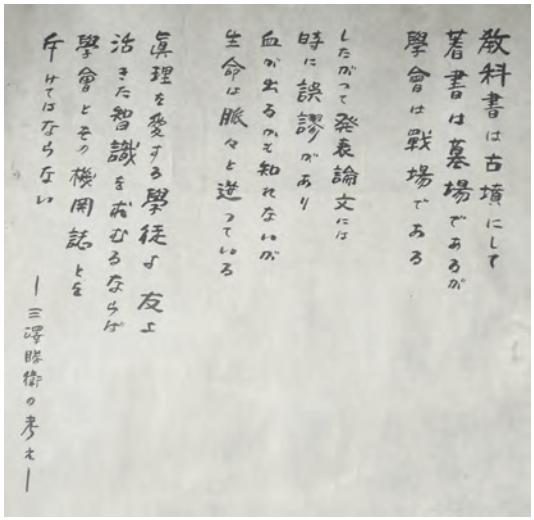
- 春蒔白菜の抽苔限界に関する試験
  （大西注：農業実習で秋どり白菜に取り組み当地が適地であることがわかったのに対し）
  「春蒔白菜はどうであろうか。よいとすれば蓼科、白樺湖方面の観光地を販路とする開拓もでき、当地域の産業として望ましいことから春蒔白菜の栽培技術を研究をした。」（p.27）
- 「花蒔づけ」の制作販売
  山菜や野菜の味噌漬け
  開校記念祭（学園祭）で販売して好評
- 地域の自然環境を活かした農業の実践
  →三澤勝衛の「風土産業」を想起させる。
  　ただし、三澤への言及はない。


春蒔白菜の
抽苔限界に関する試験
茅野高等学校　花蒔分校
一、はじめに
花蒔分校においては、農業実習として、白菜の新培
を行なつて秋どり白菜に主力をお
いているが、冬どりの実践の場合は非常
に遅れた地域であることが明にされた。
二、研究のねらひ
春蒔白菜の当地方における栽培法を研究するにあた
つて特に春蒔白菜の抽苔限界を究明することを目的と
した。
春蒔白菜は、藤井植物士によれば冬の寒（夏）長日
処理を強上（三六月以下に「花芽分化期に於ては
さに大体長日である・・・」
同著二五一頁「元来白菜の花芽分化は低温によるもの
のようであるから・・・白菜の花芽分化を許す限度
が何度であるかは今判然としないが本校（千葉大学
松戸園芸学部）における実験結果によると大体平均
— 27 —

分校での教育実践：文化啓蒙・行動

- 著名人を招いて、講演：生徒と接する
- 北山分校
  臼井吉見：近隣の教員にも呼び掛け
  県視学：三十幾年間に亘る天体観測の話
- 花蒔分校
  金原省吾（きんばらせいご、湖東村出身の美術史家、歌人）
  　島木赤彦について、花蒔分校校歌作詞
- 農村青年の育成
- 地域行政への働きかけ
  花蒔分校のために湖東村（当時）から土地を無償提供

5. 三澤勝衛との関係


教科書は古墳にして
著書は墓場であるが
學會は戰場である
したがって發表論文には
時に誤謬があり
血が出るかも知れないが
生命は脈々と進っている
眞理を愛する學徒よ友よ
活きた智識を求むるならば
學會とその機関誌とを
斥けてはならない
―三澤勝衛の考え―

- 資料の中に三澤勝衛の著書はなかった。
- 牛山氏の農業を中心とした教育実践
  「風土産業」を想起させる。
- 三澤文庫の壁にある三澤のことば
  「教科書は古墳にして、著書は墓場である」
- 牛山氏の教育実践は、三澤のことばの実践的継承？
  書物からではなく、教室での直接的教えを受け継ぎ、実践した？
  →穿ちすぎたとらえ方か？

- 三澤のことばの出典・原典は？
  著書ではなく、口伝？（←「三澤勝衛の考え」）
  三澤の謦咳に接した人にしか真意がわからない教え？
- 三澤の早世に起因か。
  三澤勝衛（1985-1937）享年52歳
- 三澤の思想・教え
  三澤の著作では肝心なところが伝わらないと考え、またそのことを恐れた直系の弟子たちが何とか伝え続けようとしたのが、没後の著作『風土産業』なのかもしれない。
  cf.大西拓一郎（2024）「三澤勝衛『風土産業』はどう受け継がれてきたのか」『市民科学ニューズレター』5号（なお、『新地理教育論抄』1967年、信濃教育会出版部を見落としていました。）

- 牛山氏が諏訪中学校に入学・在籍したのは、1922～1926年
- 三澤勝衛が諏訪中学校に在任したのは、1920～1937年
- 牛山氏の在学時は、三澤が赴任して間もないころ
- 三澤の「風土産業」は最晩年：『新地理教育論』（1937年刊 収録）
- 牛山氏の在学と三澤の在任の時期は、重なっているが、牛山氏の在学中の段階で、三澤自身も「風土産業」の思想にはまだ達していなかったのではないか。そうすると、三澤から諏訪中学校の教室で直接影響を受けたことは考えにくい。
- 『風土産業』1941年信濃毎日新聞社、1947年蓼科書房：没後刊行
- 牛山氏の資料に三澤の著作は見つかっていない。牛山氏の蔵書を見る限り、関心を寄せていれば購入していただろうことは十分に予想できる。
- 牛山氏の「風土産業」的活動は、三澤の影響ではなく、牛山氏自身による独自の思考による教育実践だったのではないだろうか。

---

6. 「弱いつながり」の力と地域そして文化

- 牛山初男という方言学・言語地理学に顕著な足跡を残した、諏訪の市民科学者の研究・足跡・人物像・教育に対し、遺された資料類を元にアプローチを試みた。
- その結果、予想・期待と結果には、齟齬が見いだされた。
- 諏訪の市民科学のキーパーソンである三澤勝衛と諏訪中学校で接近があったことはたしかである。
  しかし、牛山資料（また牛山論文類）には、三澤勝衛の著作類はない。
- 一方、牛山氏の永明高等学校での農業を中心とした教育実践には三澤の思想が感じ取られる。
  しかし、それは三澤からの影響ではなく、独自に獲得し到達したものと考えられる。
- 同時期（1930年代～1960年代）に諏訪地方では、方言学・考古学・地理学・天文学などの諸分野で市民科学が活発化
  しかし、各分野の間に有機的なつながりが見えてこない。

- 諏訪の市民科学者たちのつながりには、必ずしも強さが感じられない。
  むしろ、冷淡な感じさえ受ける。
- 牛山資料、牛山氏の著作
  三澤勝衛のほかにも同郷・同窓の方言研究者への言及がない。
  土川正男（1948）『言語地理学』（あしかび書房）が蔵書にない（ただし、別の書籍はある）。
  信濃史学会『信濃』（牛山氏ほか方言関係の論文が掲載）は製本して所蔵（書き込み等はなし）
- 藤森栄一
  『信州教育の墓標』（1973年、学生社）：方言学には言及なし
  土川（1948）の「あしかび書房」は藤森の出版社
- 諏訪天文同好会
  立ち上げた河西慶彦の晩年を共有期のある同好会メンバー（たとえば、故・藤森賢一氏など）のだれも知らない。

- 諏訪の市民科学者たちの間にあるのは「**弱いつながり**」ではないか
- 「弱いつながり」が市民科学・市民科学者に研究を進める力をもたらしたのではないか。
- 「弱いつながり」：ネットワーク論における「弱い紐帯」
  「弱い紐帯の強さ」（グラノヴェッター1973：野沢慎司編『リーディングス ネットワーク論』2006年、勁草書房）
- 「弱いつながり」
  固有のグループを活かしながらもグループ中に凝り固まらず、外からの力も利用
  →「強さ」を生み出す。

- 「弱いつながり」としての外とのつながりは、牛山氏の場合、諸地方の研究者同士のネットワーク、学会発表、柴田武（東大言語学）との関係が牛山資料で確認される。牛山氏以外でも、土川正男（方言学）氏の学会発表、河西慶彦・五味一明（変光星）の『天文月報』（日本天文学会）への報告、藤森賢一氏（太陽）の国立天文台への内地留学、国際機関への報告など
- 「市民科学」は「協働」「連帯」の側面が注目されがち
  cf.『科学』2025年2月号 特集：シチズンサイエンス―協働から生まれる知の形
- 「協働」「連帯」だけではない、「個」どうしが「弱いつながり」を持ちながら外とつながり、その「弱さ」ゆえの強い力を発揮したのが、**諏訪の市民科学**

- 1930～1960年代（戦前・戦後）の諏訪地方
- 諏訪地方の空間性
  諏訪湖の周り、八ヶ岳・南アルプスなどに囲まれた盆地
  孤立して見えるが、甲州街道、中仙道で外とつながる＝**地域性**
- 「わかるようになりたい」「ここにあるものをいかしたい」＝課題
  課題にとりくむ＝市民科学の「熱」のようなものがこの期の地域にただよう。
- だれに聞いてもわからないから、みずから、課題に向き合う。
  周りの動きを少し気にとめながらも、ひとはひととして先を見つめる。
  学界（アカデミア）＝外の力も積極的に活用する。
  アカデミアの大きな幹に寄りかからず、それぞれが己の道を進む。
  ＝**諏訪の文化**
- 外から見ると堅く見える諏訪の中のつながりであるが、意外なことに外を拒むことのない「弱いつながり」であり、それが諏訪の市民科学を推進したらしい。
- 必要以上につるまず、大きな幹に寄りかからない＝市民科学のひとつの側面かもしれない。

7. むすび

- 方言学・言語地理学で顕著な足跡を残した牛山初男氏の生涯、遺された資料、教育実践を紹介し、諏訪の市民科学のキーパーソンである三澤勝衛との関係を考察した。
- 牛山氏の諏訪中学校在学期と三澤の諏訪中学校在任期は重なるが、牛山資料や著作に三澤との接点が確認できない。
- 牛山氏の教育実践は三澤の「風土産業」を想起させるものの、三澤からの影響ではなく、結果的に同じ思想にたどりついたと考えられる。
- 牛山氏の研究・教育実践が示すように、諏訪の市民科学の展開は、市民科学者どうしの「弱いつながり」がもたらした点を重視する必要がある。
- 「弱いつながり」は、諏訪の地域性、地域文化を背景に持つという点で、外からの見え方（「諏訪人の強い連帯」のようなイメージ）に反する逆説的な結論に至った。
- 思えば、三澤はそもそも諏訪から見れば「外の人」であった。諏訪に身を投じた三澤は、この地で、市民科学の展開に「触媒」のような役割を果たしたとみることもできよう。
- 牛山資料には、未開封の束が残されており、今後はそれらを開き、調査と考察を継続したい。